

目 的

那珂川のアユ資源を持続的に活用するためには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行う必要がある。そこで2023年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況に関する情報を収集した。

材料および方法

**友釣りによる漁獲状況** 栃木県那珂川漁業協同組合連合会傘下の3漁協に対し、調査票150枚を前年度の賦課金納入者数の割合に応じて配布した。各漁協がそれぞれ選定した調査員に対し、2023年6月1日の釣り解禁日から11月30日までの間、釣行日の釣獲地区（本流7地区および4支流計11区域に分類；図1）および釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を0として扱った。なお、回収率は42.7%であった。

**投網による漁獲状況** 釣りと同様の方法で調査票50枚を配布し、漁獲状況及び漁獲重量の調査を行った（投網は7月10日から区間毎に順次解禁）。なお、回収率は40.0%であった。

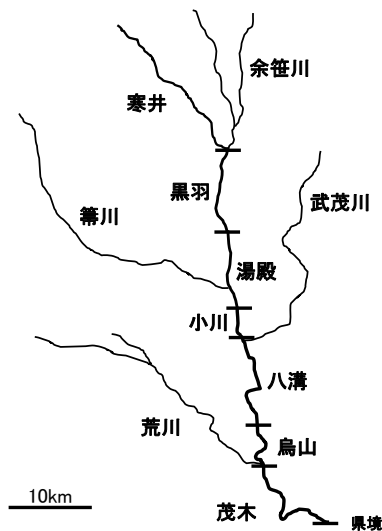


図1 那珂川における釣獲地区の区分

結果および考察

**釣れ具合・獲れ具合** 漁期全体での釣れ具合は12.9尾/人/日で、平年（9.7尾/人/日（1998年から2022年までの平均））よりも3.2尾上回った（図2）。月別では、全ての月において釣れ具合が平年を上回ったが、6月から8月にかけて低下する点が特徴的であった（図3）。

解禁日の釣れ具合は18.8尾/人/日と好調で、平年（9.2尾/人/日）より著しく増加し、特に烏山、寒井、荒川

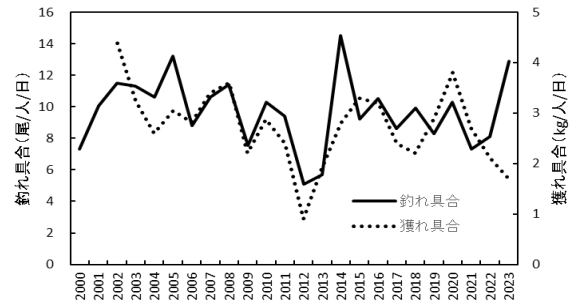


図2 釣れ具合および獲れ具合の推移

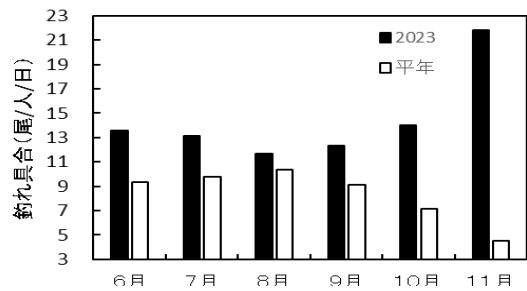


図3 釣れ具合の月別推移

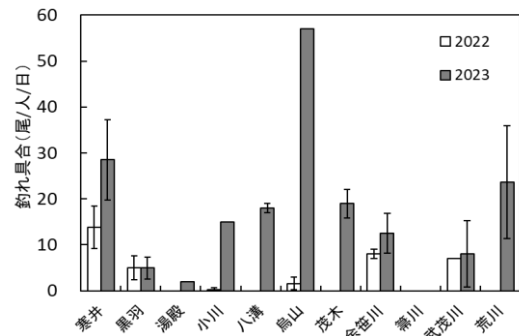


図4 地区別の釣れ具合（解禁日）  
（エラーバーは標準偏差を示す）

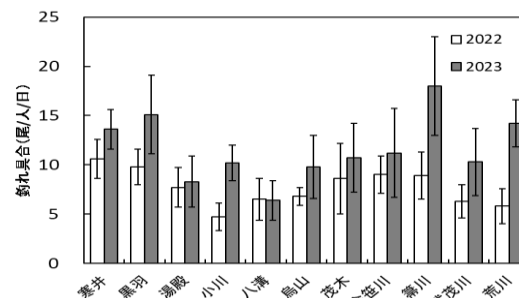


図5 地区別の釣れ具合（漁期全体）  
（エラーバーは標準偏差を示す）

においては20尾/人/日以上と著しく高くなった（図4）。

地区別では、支流の篠川で18.0尾/人/日と非常に好調だったが、本流の八溝地区では6.4尾/人/日にとどま

るなど、地区ごとの差が大きかった（図5）。

投網による獲れ具合は、1.7kg/人/日で、前年（2.1kg/人/日）及び平年（2.7kg/人/日）よりも減少し、過去2番目に少なかった（図2）。

**出漁日数** 釣りの出漁日数は9.3日/人で、前年（10.3日/人）の90.3%、平年（19.4日/人）の47.9%となった。一方、投網の出漁日数は11.2日/人で前年（9.5日/人）から増加し、ほぼ平年（11.6日/人）並であった（図6）。

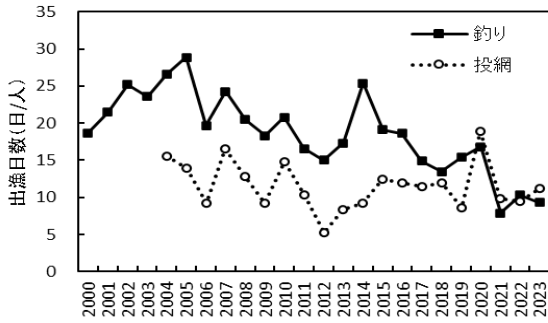


図6 釣りおよび投網の出漁日数の推移

**釣獲尾数・漁獲量** 釣りによる釣獲尾数は、197.0万尾で前年（97.6万尾）よりも大幅に増加し、過去10年の平均（177.7万尾）より僅かに上回った。また、釣りによる漁獲量は126.7tで2021年（45.2t）から3年連続で増加したものの、依然として低い水準にあった（図7）。地区別漁獲量は、黒羽地区が最も多く（29.5t）、八溝・烏山地区が最も少なかった（2.6t）。本流の2地区（八溝、烏山）以外の地区では、前年を上回った（図8）。

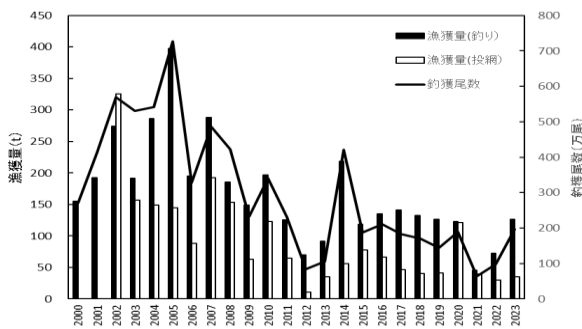


図7 釣り・投網による漁獲量および釣獲尾数の推移

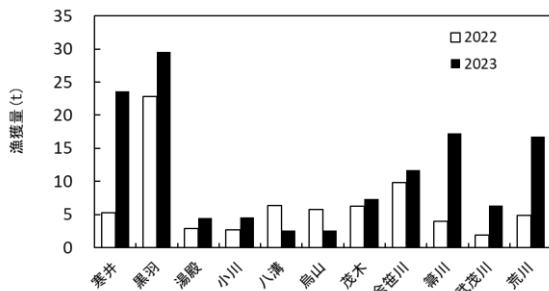


図8 地区別の漁獲量（釣り）

投網による漁獲量は35.2tで、前年（30.3t）を上回ったものの、過去3番目に少なかった（図7）。地区別では、本流の2地区（八溝、茂木）及び支流の荒川では前年より増加したが、その他の地区では全て減少に転じていた（図9）。

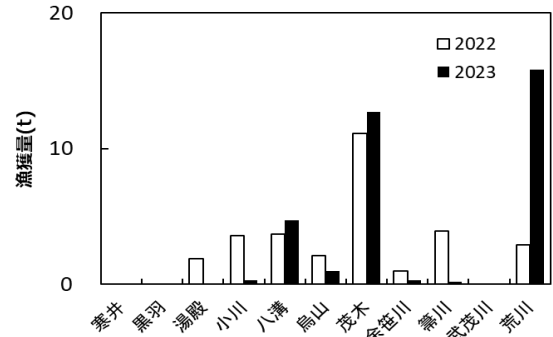


図9 地区別の漁獲量（投網）

**出漁者数** 釣りの出漁者数は9.0万人で前年（8.7万人）の103.4%となった。また、投網の出漁者数は1.8万人で前年（1.5万人）の120.0%となった（図10）。

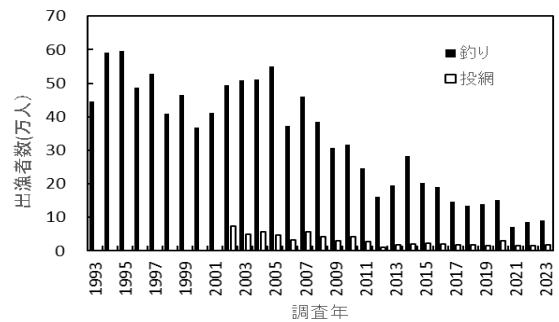


図10 釣りおよび投網出漁者数の推移

なお、2023年の調査結果では漁期全体の釣れ具合が良かったにもかかわらず、漁協や遊漁者等から特に7月以降の釣果の低迷を指摘する意見が多く聞かれた。この理由として、釣れ具合や漁獲量が地区によって大きな差がみられたことから、例年以上に釣獲状況の良い漁場に出漁者が集中したことが集計に反映されたためと考えられる。

（指導環境室）